

アルフレッド・ジェラルルの「夢のあと」

「関東遺跡文化研究会会報」特集第5号 2003年5月29日発行・掲載

成田良幹

(1) 「水屋敷」との巡り会い

筆者が横浜元町に越してきたのは1989(平成元)年のことであった。

横浜郊外の新興住宅地で幼児期を過ごしたことから、かねてからの憧れであった「元町」に居を構えた嬉しさに限界を徘徊する余り、新居のすぐ近所に「水屋敷」なる奇妙な遺構があることに気づくまでに、それほど長い時間を要しなかった。

元町商店街を石川町側から海に向かい、クリフサイドのある代官坂に折れる一本先の路地を右に折れ、平坦な道を「元町公園プール」に向かって歩いていくと、元町公園プール下の公園に聳え立つヒマラヤ杉を背景にして、トタンの三角屋根の工場風の建物が道の右手に、そして左手には似たような高さの土台を持った建物の基礎部分だけが残っていて、金網の巡らされたコンクリートの土台の表が露出している、そんな風景を目前にする。

この左側の百平米程の敷地の建物跡は、地上1メートル位の高さまで、古びて変色した赤煉瓦が整然と積み重ねられた土台を持っている(因みに、右の建物の土台は長い年月に侵食された花崗岩の石積みである)。耳を敬てると、湧水の流れる音がする。その昔には道を挟んだ右側の建物と対になっていたと思われる、その赤煉瓦の土台の手前、外国人墓地に上る坂の脇にある側溝から、湧水が無尽蔵に溢れ出しながら、すぐ傍の下水溝に無造作に落ちていく。余りに透明で美しい水なので、側溝に手を浸してみると、初夏だというのに、ひんやりとして心地よい。さらに耳を澄ませてみると、この土台の奥底から、水溜めに流れ落ちる低い水音が聞こえる。きっとこの地下には貯水槽があるに違いない。

これが、地元の住人たちが「水屋敷」と呼んでいるものとの最初の出会であった。

(2) YOKOHAMA WATER

やがて時を経ずに、「水屋敷の謎」はNHKのYV番組と、朝日新聞地方版・神奈川特集「アベニュー かながわ」で立て続けに紹介されることになる。こうして相次いでマスコミに取り上げられたのは、当時、その遺構の解明が徐々に進みつつあったことによるものであろう。これらの内容はほぼ同様のものだったので、主に、現在手元にある後者(1990年8月25日)の解説に従ってみよう。

その昔、YOKOHAMA WATERと呼ばれている水があった。開港後の横浜に寄港する船舶が、給水船より買う飲料水は、高質で美味であり、赤道を越えても決して腐ることなく、船乗りたちに非常に珍重されていた、という。

幕末から明治初期にかけて、横浜には日本人を含む

いくつかの「船舶給水業者」があったが、とりわけ有名であったのが、アルフレッド・ジェラルルというフランス人の営む「ジェラルル商会」であった。

ジェラルルは、その大半が埋立地で飲料水にさえ不自由していた当時の横浜にあって、山手を水源とする井戸を掘り、その貯水槽を元町1丁目(現在の水屋敷)の地下につくって、これを300メートルほど離れた堀割川(元町商店街の北に並行して位置している掘割運河)まで鉄管を敷設して送水し、ここから給水船に積んで、横浜港に停泊中の外国船舶に販売していた。

地元で「水屋敷」と呼ばれているこの遺構を、横浜市が本格的に調査したのは、1987(昭和62)年。地下の貯水槽は細長い台形状で、深さが約2.5メートル。30センチ角の煉瓦の支柱が16本、5列に並んで天井を支えている。水量は豊富で、年間を通じて貯水槽の水が尽きることはない。貯水槽に流れ込む土管・鉄管は3本が確認されたが、その水源は不明である。

更に、横浜開港資料館の1988(昭和63)年の調査により、更に100メートル南の山手側(丘側)の「元町公園プール」の北側のマンホールの下にも煉瓦造りの貯水槽が発見された。奥行き9メートル、間口2.9メートル、天井までの高さが3メートル、地表から貯水槽の底までが約9メートル。カマボコ型をした天井の奥に直径15センチの地下水の流入口があり、ここから絶えず地下水が流入してくる。そして、この「第二の水屋敷」は先の水屋敷の「上流」にあって、これと直結していることが確認された。

しかし、この「第二の水屋敷」についても、やはり水源は不明のまま。丁度この場所は、山手の丘から元町に下る谷間(谷戸)にあたり、そこには元町公園プールを囲むように深い森林があるが、果たしてそれだけの小さな谷がこれだけの水量の地下水を常時生み出す水源となりうるだろうか。

そして、記事は最後にこの水屋敷の主であった、アルフレッド・ジェラルルの謎に言及する。曰く、「どこで生まれ、いつ来日したのか。年齢は、滞在した期間は……。写真も残っていない。」

居留外国人の人名録によれば、1865(慶応元)年に、アルフレッド・ジェラルルに関する最初の記載が見られ、当初の仕事はフランス陸海軍への食料調達であった。1966年(慶応2)年6月には山手居留地(ブラフ)77番地で「船用最上飲用清水販売所」を開設する旨の広告を掲出している。また、1886(明治19)年の「日本絵入商人録」には、「瓦・煉瓦製造所」の記載があり、日本で初めてフランス瓦を焼いた人物として歴史にその名を残している、とある。

アルフレッド・ジェラルルの瓦・煉瓦は、この元町公園周辺(「元町公園プール」を中心とした、上は山手本通りから下は水屋敷の直近までを「元町公園」という)から多く出土するばかりでなく、遠く千葉県佐倉市の佐倉連隊の兵舎にまで使われていた、という。実は筆者自身、1990年頃、元町公園近辺で、風化して今にも壊れそうな赤煉瓦と、瓦の破片を収集した経験がある。いずれも、ジェラルルの文字が確認され、これを持つ掌に熱いものを感じた記憶がある。

この「日本絵入商人録」は、現在「横浜諸社会諸商

店之図」とともに、「横浜銅版画」として神奈川県立博物館編集で出版されているが、ここに出てくるジェラルルの工場の外観は、道を隔てた両側に二棟の工場が建てられており、その道の向こうにヒマラヤ杉が覗いているところは、全く現在の風景から彷彿とさせられるものがある（残念ながらこのヒマラヤ杉は 2001 年の元町公園の改修工事の際に伐採されてしまったが）。

そして、後述するように、その工場の内部も銅版画で克明に描かれている通り、この明治初年において、既に蒸気機関を利用した機械式製造工程を導入していたことが分かっている。アルフレッド・ジェラルルは、水を売って得た初期資本により、1886（明治 19）年の時点で、既に蒸気機関を利用した近代工場を営んでいたのである。

（3）飛鳥田一雄の「三人ジェラルル」

イザヤ・ベンダサンは「日本人とユダヤ人」の中で、日本人は「水と安全はタダ」だと思っている、と書いた。事実、われわれは、ごく最近に至るまで「水を買う」という習慣はなかった。しかし、幕末から明治初期にかけて、いかに外国船相手とはいえ、世界に名を轟かせた YOKOHAMA WATER なる「水」を売っていた男がいた。そして、その足跡は漠然とは辿れるものの、その生涯には謎が多い。この、アルフレッド・ジェラルルという謎めいた水売り男に魅了され、その人物像にロマンを抱いた人々が過去に数多くいたとしても何の不思議もないだろう。

元横浜市長であった、飛鳥田一雄（あすかた・いちお）が、有隣堂の月刊誌「有隣」に「ふらんす瓦の謎」という歴史エッセイを書いたのは 1974（昭和 49）年 7 月のことであった。

その後、このエッセイは、40 編近い飛鳥田の他のエッセイと共に「素人談義・三人ジェラルル」という単行本に収められ有隣堂から刊行されている（1974 年 12 月）が、このタイトルになっている「三人ジェラルル」とは、エッセイ「ふらんす瓦の謎」のことを指しており、飛鳥田のこのエッセイに対する思い入れの強さを示していて興味深い。

このエッセイの中で元町プール下の「水屋敷」から見つかった二枚の瓦、一枚にはその裏面に「A・ジェラルル、一八七三年、ヨコハマ百八十八番、二五三三」（2533 は皇紀のこと）とあり、もう一枚には「アルフレッド・ジェラルル、ア、ヨコハマ、一八八五年、チュイレリーメカニック（機械窯）」と銘がある、との記載がある。

この事実から、A・ジェラルルが元町に煉瓦工場を持っていたのは短くとも 1873（明治 6）年から 1885（明治 18）年の間であること、については確認できるわけである。そして、飛鳥田は、A・ジェラルルについて関心を抱き、様々な文献を調査したが、この時点では A・ジェラルルというフランス人については謎が多かった。つまり、いつ来日し、日本に帰化して死去したのか、あるいはいつフランスに帰国していつ死去したのか、については不明だったのである。

因みに、飛鳥田は、幕末から明治にかけて、もう二人のフランス人ジェラルルが存在していたことを指摘する（おそらく、フランス人にとっての「ジェラルル」という苗字は、日本の「森さん」くらいに一般的なものであろう）。その一人は、幕末、横須賀に小栗上野介、川路左衛門尉が創設した「横須賀製鉄所」のお雇い外国人にジェラルルの名前が見える。記録によれば、このジェラルルは 1869（明治 2）年から 3 年間の契約技術官であった、と記載されている、という。

そして、もう一人のジェラルル。飛鳥田が明治 3 年から刊行されている「横浜・外人目録」をひっくり返してみつけた「肉屋のジェラルル」が存在する。これによれば、1870（明治 3）年に、横浜居留地（バンド＝平地の意）169 番に肉屋を営業し、山手居留地（ブラフ＝丘の意）77 番に居住していた、とある。バンドの 169 番というのは、現在の県庁前にある「横浜港郵便局」の近辺であるが、この発見のポイントは、彼の居住地であった、ブラフの 77 番とは、まさに「水屋敷」の旧番地に一致することである（因みに、瓦に記載のある、バンドの 188 番は、地番の変更により、バンドの 169 番より変わったことも、近年の研究で確認されている。尚、飛鳥田の言う「横浜港郵便局近辺」は新番地の 169 番である）。

この「3 人ジェラルル」の内、横須賀製鉄所のお雇い外国人のジェラルルは、その契約期間から考えると、他の二人のジェラルルとは無関係でありそうだが、煉瓦屋のジェラルルと肉屋のジェラルルには、その居住地が一致していることから同一人物と考えるに足る根拠がある。因みに、1965（慶応元）年には山手の裏側にあたる北方村に「屠牛場」ができており、ブラフの 77 番で販売用の牛肉を仕入れることは十分に可能であった。そして何より、1865 年当時、アルフレッド・ジェラルルがフランス陸海軍の食料調達を生業としていた、という記述とも符号することになる。

更に、飛鳥田は 4 人目の「井戸掘りジェラルル」を探し出す。これは「ファー・イースト」という横浜で刊行された英字新聞の 1870（明治 3）年の記事にある、「最近、フランス人、ジェラルル氏が井戸掘りに成功した」という記載に基づくものである。当時の横浜居留地（バンド）は埋立地であったことから、この掘井の殆どは塩分を含んで汚濁しており、飲用に足りるものは二箇所しかなかった、という。そのひとつは、町会所裏、現在の横浜開港記念会館にあった井戸、もうひとつは、三井組、現在の三井物産横浜支店前の井戸であった、という記載が「横浜沿革誌」にある。このため、「暁天より日没迄、此の井戸に蟬集し、順を争うて汲上げ運搬す。偶々配水業者あり。遠路より運搬せり」と、横浜の街なかに、いわゆる「水売り」が存在していたことを示している。そして「然れども一定の水源なく、或いは野毛浦、或いは太田村農家の飲用水を汲取りを以て間々欠乏を唱え水料を増加し未だ需求に應せず。戸々水屋、水屋、督責し遂には下婢、丁稚は四辻にたたずみ、水桶を担う者に邂逅し前後を争うあり」と、市民用の飲料水の不足はかなり逼迫した状況であったことが想像される。

横浜の近代水道の整備は、イギリス人のお雇い外国

人、H.S.パーマーによる1887(明治20)年の県営水道の揚水を待たざるを得ないが、これ以前に木樋管を用いた「横浜水道会社」が1873(明治6)年に、茂木惣右衛門、大倉喜八郎らの横浜生糸財閥によって創設されている。これは、多摩川を水源とし、橘樹郡鹿島田村から木樋管を関内まで敷設したものであったが、流石に木樋管では、と想像される通り、水漏れ、腐食、そして塩分の混入によって、この水道事業は間もなく破綻している。

こうした、埋立地としての横浜の生活用水の恒常的な不足という高いニーズを背景にして、「井戸掘りジェラルール」は、掘り当てた井戸水を、横浜港に入港した船舶用に給水販売していたのである。「水を売る」という少々隙間商売と思われる商売ではあったが、こうした時代背景と地域的特殊性を考え併せると、水源さえ確保できれば、効率的で高収益の期待できる有望なビジネスであった、といえるかもしれない。

飛鳥田は、お雇い外国人であった、横須賀製鉄所のジェラルールは別人であるが、瓦工場、船舶給水業、そして肉屋のジェラルールは同一人物であると判断している。その根拠は、先に挙げた「時代的根拠」と、当時の「お雇い外国人」(横須賀製鉄所のジェラルール)が天皇に接見できるほどの地位であったことを考えた場合、他の三つの職業は異質である、という飛鳥田の歴史的職業観がベースとなっている。

しかし、飛鳥田も言うように、このA・ジェラルールがその後どうなったか、は不明の点が多かった。先の「横浜・外人目録」によれば、1876(明治9)年と1890(明治23)年に一旦、フランスに帰国していることは分っている(目録に氏名は残るが、「一時不在」と記載されるためである)。飛鳥田が聞いた古老の話として、1877(明治8)年には、ブラフ77番の煉瓦工場の脇に居住のための屋敷を立てた(因みに、「日本絵入商人録」のジェラルールの瓦工場の外観の右奥、すなわち敷地の南西の方角に住居と思われる建物の二階部分がかすかに見受けられる)が、大正の初期(大震災以前)には既に壊れていた、という逸話を紹介している。また、横浜外国人墓地の埋葬者名簿の中にジェラルールの名が記載されていないことから、おそらく屋敷が無くなった時期(1910年頃)と前後し、日本を離れたのではないかと、という推測を行っている。

飛鳥田が紹介しているもうひとつの逸話は、ジェラルールが帰国の際に、フランス人の神父に財産整理を預託していった、ということである。これは、彼が老後に至るまで家族を持っていなかったのみならず、日本国内で財産整理を依頼できる友人にさえ恵まれなかった、ということを示している、と「孤独なる人物像」を推測している。

「日本絵入商人録」(明治19年版)のジェラルール商会の頁には、1884(明治17)年にパリで開催された博覧会の陶芸部門賞をとった賞牌が印刷されており、職人的意識を強く持ったジェラルールの粹人の一面を伺わせる一方で(事実、ジェラルールの「ふらんす瓦」は現在も都内の古美術店では工芸品として取引されるケースも多い、という)、水売りで得た資本を瓦製造に充て、更に機械窯を導入し、実業においても好調

な人生を送ったようにも見える。しかし、と飛鳥田は言う。水売りの商売は、先に述べた近代水道の整備により衰退し、1879(明治12)年には、バンド188番(地番変更前は169番)の事務所を引き払い、ブラフ77番の瓦工場一本に商売を絞っている。やがてその瓦製造業も、日本人製造の瓦・煉瓦で、廉価で質の良いものが出回り始め、1905(明治38)年には、外人名簿からも「瓦製造」の表示が消滅してしまう。これを遡る1890年に、彼は再び一端帰国し、再度来日した形跡はあるが(あるいは新規事業の準備をしていたのかもしれない)、その後のことは詳らかではない。おそらくは、孤独で淋しい老後をフランスで送ったのではないかと、というところで飛鳥田の筆は終わっている。

(4) アルフレッド・ジェラルールの実像

さて、1990年台初頭まで、アルフレッド・ジェラルールの実像は明らかにされることもなく、一般的に知られていたその人物像についても、飛鳥田の「三人ジェラルール」の歴史的想像力に漠然と負っている部分が多かったことは、1990年の朝日新聞・神奈川版の記事からも、ご理解いただけたのではないかと、思う。

この「アルフレッド・ジェラルールの謎」は、しかし、ある一枚の文書の発見によってまたたく間に氷解していくことになる。

1992(平成4)年10月31日号の横浜開港資料館・館報「開港のひろば」に以下のような記事が掲載された。

神奈川県立文化資料館が所蔵する、横浜居留地関係の基本資料の中に「永代借地権に関する知事官房外務関係文書」があり、これを今回悉皆調査したところ、かなりの地権所有者を明治期まで遡ることができた、というのである。これは、どういうことかということ、外国人居留地に居住し、あるいは事業を営む外国人は、その土地を永代借地権という形で占有していた。つまり、その取得や譲渡の記録を調べていくと、外国人居留者の出入国の時期などが判明することになるのだ。

そして、この永代借地権に関する文書の中に、アルフレッド・ジェラルールの名を発見した、というのだ。これは、ジェラルールが占有していた、ブラフ77番の永代借地権が1927(昭和2)年に遺産相続人のジュリアン・アンリ・シャルトン(この人物とジェラルールの関係は不明、飛鳥田の言う神父かその関係者か?)から横浜市に売却された際に、横浜フランス領事館から提出された書類に、ジェラルールの死亡に関する詳細な記載があったのである。この記録をもとに、死亡地である、フランスのランス市(パリ市の東北)に問い合わせたところ、ジェラルールに関する出生・死亡証明書が送られてきた。

これによれば、アルフレッド・ジェラルールは1837年3月23日に、パン屋を営んでいた父ジャン・ニコラス・ジョセフ・ジェラルール(当時25歳)と母テレーズ・ランベール・シェリュイ(当時23歳)との間に生まれた。そして、1915年3月19日、ランス市内の自宅で死去。享年77歳。独身、金利生活者、で

あった。

こうして、次第にアルフレッド・ジェラルドの実像が明確になりはじめてくる。同じく 1995 (平成 7) 年 11 月 1 日号の「開港のひろば」では、新資料「ランスの博愛家・アルフレッド・ジェラルド」(E・デュボン著)、「ジェラルド・コレクション目録」(ランス市博物館作成)、フランスの新聞記事などをもとに、晩年のジェラルド像をかなり明らかにしている。

新資料によって、アルフレッド・ジェラルドの来日年は、1863 (文久 3) 年と特定された。因みに、この年は、フランス海兵隊が山手に上陸し、現在のフランス山に駐留を開始した年にあたる。しかし、フランスに帰国した時期については、1878 (明治 11) 年説 (15 年の滞日期間) と 1890 (明治 23) 年前後説 (30 年の滞在期間) という二説があって、定かでない。しかし、上述のように「横浜・外人目録」によれば、1890 (明治 23) 年までは記載があることから、後者の説が有力なものではないか、と思われる (但し、1904 年までは、外人名簿により、瓦製造業を営む「ジェラルド商会」自体は存続が確認されている)。

E・デュボンによると、晩年のジェラルドは、大柄でがっちりとした体格の持ち主で、顔はまるまると太っていた。父親の営んでいたパン屋を図書館に改造し、近くのカフェで学者や退役軍人、判事などの町の名士たちと紅茶やワインを楽しみながら、自慢の蔵書を見せていた、という。その蔵書は横浜で築いた財産によって蒐集された 23,000 冊に及ぶもので、農業技術関係の本が大半であった。ジェラルドは地域の農業に深い関心を寄せていて、自らの遺産で「ランス農業サークル」を設立するように遺言を残した。また、1891 年には、日本で蒐集したコレクション (仏像、能面、刀剣、陶器、木版画、古銭など) をランス市に寄贈している。現在もランス市美術館に残るジェラルド・コレクションの数は 2,500 点に及ぶ。

死亡証明書によれば、1915 年に自宅で死去した、となっているが、E・デュボンによると、墓所は養老院の地下室にある、という。また、1914 年には、ジェラルドが養老院に入った事実も確認されていることから、養老院で死亡した可能性も否定できない。時は第一次世界大戦下であり、葬儀は空襲を避けながら行われ、20 名ばかりの会葬者に見送られる、淋しいものであった、と E・デュボンは書いている。

(5) 歴史的ロマンの行方

「水屋敷」との巡り会いから、謎の人物アルフレッド・ジェラルドの人物像を巡る探求のプロセスを追ってきた。「水屋敷」という遺構をきっかけに、その昔、世界に名を轟かせた YOKOHAMA WATER を売っていたジェラルドに魅され、再び異国の地へと帰っていったが故に、その足跡を追うに謎多く、ジェラルドの人となりについては、過去多くの人々がその人物像に歴史的想像力を巡らし、歴史的ロマンを抱いていたことも知った。そして、飛鳥田一雄もその一人だった。

最近の研究によって、アルフレッド・ジェラルドの実像が明らかにされつつある訳だが、改めて感心する

のは、飛鳥田の歴史的想像力が非常に正鵠を得たものであったことが、逆にこの歴史的事実の発見によって証明された、ということである。ジェラルドの帰国の時期については、飛鳥田の想像を 10 年ほど早まっていたが、3 人のジェラルドが同一人物であることを見定めたこと、そして単なる実業家ではなく「粹人」としての側面も持っていたこと、更に、ジェラルドが晩年に至るまで家族を持たず、孤独な男であったこと。こうした「真実」を見通した歴史的想像力は、飛鳥田の持つ人間観察の鋭さに支えられたものではなかっただろうか。まさに、歴史にロマンを感じるということは、遺構や遺跡を通じて、誰もがこの歴史的想像力を掻き立てられるからに他ならない。

後に日本社会党委員長となる飛鳥田一雄ではあるが、筆者にとっては、その幼少の頃に横浜市長を務めた、気さくで、横浜の風物と歴史をこよなく愛した、ひとりの「ハマっ子」であった。そして、その気概が、ジェラルドという人物像を通じて筆者自身と結びついている、と感じている。

ジェラルド拾遺物語をいくつか。

文中で紹介した通り、アルフレッド・ジェラルドは、水を給水船に積むために、現在の「水屋敷」の位置から、北へ 300 メートルの堀川まで、鉄管を敷設した、という記載が朝日新聞の記事にある。そして、その時期は、ジェラルドが開業予告広告を出した、1866 (慶応 2) 年にまで遡る。1873 (明治 6) 年に日本人が「横浜水道会社」を設立し木樋管を使った水道で悪戦苦闘していた 7 年も前、そしてお雇い外国人のパーマーが 1887 (明治 20) 年に漸く近代水道を引く 21 も前のことである。もしも、この時期にジェラルドが鉄管で 300 メートルの水道を引いたとすれば、これは公共用ではないとはいえ、横浜で最初に敷設された上水用の水路、ということになるだろう。

残念ながら、現在、水屋敷から堀川に至る鉄管の存在は確認されていないし、堀川に水屋敷から湧出している水が放出されているという事実も確認できていない。朝日新聞の記事にも拘らず、筆者自身は鉄管ではなかったのではないかと、という推測をしている。パーマーの近代水道も当初は陶器管を使用しており、鉄管が用いられたのは水道が開通してから後のことである。ジェラルドは、やはり瓦製造技術を使った陶器管か、場合によっては、煉瓦を使った地下水路を埋設したのではないだろうか。先に記載したように、横浜市がジェラルドの遺産相続人であったシャルトンから永代借地権を買い戻した際に支払った 220,000 円の内、給水設備代金が 26,302 円、含まれている。つまり、この中には水屋敷とこれに付随する水路の代金も含まれ、現在、横浜市がこれを所有している、ということになる。

おそらく、この 300 メートルの水路の一部は元町公園から堀川に至る路地の下に眠っていると思われる。勿論、この 100 年の間に、直交する元町商店街や元町仲通りのガス、水道の敷設工事や電柱の地下化工事によって、一部、あるいはかなりの部分が裁断されているであろう。しかし、江戸末期に、水を商売にしていたフランス人がどのように地下上水路を埋設したか、

というのは興味深いテーマであろう。残念ながら、横浜の近代水道の歴史の中にはジェラルルの名は登場してこないのだが。

その後、元町公園の整備事業に伴い（先にも述べた通り、明治19年の銅版画のジェラルル工場の奥に描かれていたヒマラヤ杉はこの際に惜しくも伐採された）、遺構としての「水屋敷」の整備工事が行われた。貯水槽上部の天井が取り払われ、赤煉瓦で作られた貯水槽の全貌を俯瞰できるように周囲と中央にボードウォークの通路がつくられ、現在は16本の柱を含め、その遺構の中をくまなく見渡すことができる。きれいに整備されたボードウォークの脇にはジェラルルを紹介するジェラルミンのパネルを貼ったコンクリートの壁がある。そして、驚くべきことに、ここにはアルフレッド・ジェラルルの肖像写真が印刷されている。

「謎の人物」であったジェラルルの写真は、一体どのように発見されたのだろうか。再び、2000（平成12）年2月9日号の「開港のひろば」の記事から拾おう。明治政府のお雇い外国人の一人で、軍事分野で招聘されたフランス人L・クレットマンは、本務の傍ら日本各地を旅行し多くの写真のコレクションを残した。マルセイユに在住するその孫が保管するコレクションを開港記念館の企画展で展示した際に、そのコレクションの中にアルフレッド・ジェラルルの肖像写真があることが判明したのだ。但し、これはクレットマンが撮影したものではない。1878（明治11）年に、クレットマンが離日した際に、かねてからの知己であったジェラルル自身が贈呈したものである。写真の裏には「ローニン（浪人）の国の記念に」とジェラルルの自署があるという。この写真の中の41歳のジェラルルは、デュボンの伝記にあるように、恰幅があり顎鬚を蓄えた、精悍な実業家の顔つきをしている。しかし、写真の裏に書かれた、この端的な本人の自署には、どこか「はぐれもの」としての自嘲が込められてはいないだろうか。

最後に水の話に戻ろう。パーマーの近代水道は、相模川上流の道志川に水源を求め、その取水口や、中継地である西谷浄水場などには、明治・大正期の貴重な遺構が残されている。近代水道の整備後、当然、外国船への給水事業は横浜市によって水道水が供給されることになったが、この時点でもYOKOHAMA WATERの栄誉は受け継がれていた。つまり横浜市は水道水においても「名水」を確保することになったのである。確かに、筆者の記憶でも、10年ほど前までは、こうして明治以降供給され続けてきた横浜中央部（市内はいくつかの地域に区画され、異なる水源の水道水が供給されている）の水道水は東京に比べるとはるかに臭いの少ない美味な水であった。

実は、ジェラルルと同じ頃、もうひとりの外国人が横浜山手の水源に注目していた。その名は、ウィリアム・コーブランド、ノルウェー出身のアメリカ人であった。ジェラルルに遅れること3年、1869（明治2）年1月に、コーブランドは、ジェラルル同様、山手外国人居留地123番など4区画2,480坪の永代使用権を落札した。この場所は現在の北方小学校近辺であり、ジェラルルの「水屋敷」とは丁度山手の丘を挟んだ逆

側にあたる。この敷地の中には数箇所の湧水があり、そのひとつは、周囲200メートルほどの沼（天沼）に流れ込んでいた。

コーブランドは、この豊かで美しい湧き水を利用してビールを製造することを考え、1870（明治3）年に、麒麟麦酒の前身となった「スプリング・ヴァレー・ブルワリー」（「泉湧く谷のビール工場」）を設立した。現在も、北方小学校の西側に「麒麟園公園」があり、そこにビール製造創業の記念碑が建てられている。そして、今でも小学校の北側からこの公園前を下っていく坂は「ビアザケ通り」と呼ばれている。

さて、ジェラルルの没後、1927（昭和2）年、付帯する給水設備を含めて永代借地権を買い戻した横浜市は、1930（昭和5）年に、青少年の体力増進を目的に、現在の元町公園内に「元町公園プール」を建設した。周囲を鬱蒼とした森に囲まれた谷あい、位置としては先に触れた「第二の水屋敷」のすぐ南側に、気持ちのよい水を湛える50メートルプールを設営した。これは、きちんとした観客席を備えた公式競技会用プールであった。もちろん、ふんだんな水屋敷の湧水を活用するためである。しかし、これは筆者自身が地元の古くからの住人に聞いたところであるが、夏でも低温の地下水を使用していることから、昔からよく心臓麻痺による死者が絶えなかった、といわれている。現在は、水道水と地下水を半分ずつ混合しながら使用している、という話も聞いた。

敗戦直後、一時このプールはGHQに接收されていた。米兵とこれを相手にする日本人女性で賑っていた時期もあるという。現在でも、山手に住む欧米人の駐在員家族などがプールサイドで寛ぐ姿が、このプールには良く似合う。まるで、いまは故国フランスに眠る、アルフレッド・ジェラルルの遠き「夢のあと」を思い起こすかのように、筆者もプールサイドに佇む夏を繰り返して、久しい。

そんなひと夏、晩年のジェラルルに関する新事実、つまり、晩年に農業技術に深い関心を寄せていたという事実を反芻しながら、ジェラルルが明治初期の横浜で水を売っていたのは、単にビジネスのためだけではなかったのではないかと、という思いがふと頭を過ぎった。彼は、ナチュラルリストとして引退後も農業に興味を示し、そして壮年に横浜に在ったときも、山手より湧き出でる水脈の美しさをこころより愛し、その貴重さをYOKOHAMA WATERとして外国船舶にアピールしていたのではないだろうか。改めて、アルフレッド・ジェラルルの実像が明らかになりつつある今、更に彼のこころの底を掘り下げる「歴史的想像力」が必要なのかも、知れない。

（完）